

『三國志集解』のつかいかた 其三・四

佐藤 ひろお

◆関連年表

5 建安十三年 荊州牧の劉表が卒し、魯肅が弔問に訪れる。劉備と同盟を結び、曹操を赤壁で破る。

劉備が、南部四郡（武陵・長沙・零陵・桂陽）を平定。周瑜が、曹仁と江陵を争う。

建安十四年 曹仁が江陵から撤退し、周瑜が南郡太守として屯す。孫權が劉備を公安に屯せしむ。

建安十五年 劉備が京を訪れ、孫權に領土を交渉。周瑜が卒し、魯肅が兵を継ぎ、程普が南郡太守に。

建安十六年 法正・張松に誘われ、劉備が益州に入り、張魯を防ぐ。

10 建安十八年 曹操が濡須で孫權を攻める。劉備は孫權からの救援要請を受け、劉璋に増兵を要求。

建安十九年 劉備が雒城を陥落させ、諸葛亮・張飛・趙雲を荊州から召し、成都を得る。

建安二十年 益州を得た劉備に、孫權が荊州を要求するが決裂。呂蒙が、長沙・零陵・桂陽を攻略。

關羽と魯肅が單刀會。曹操の漢中進攻により、湘水にて領土を区切ることで妥結。

建安二十二年 孫權が都尉の徐詳を派遣し、曹操に降る。魯肅が卒して、呂蒙が漢昌太守となる。

15 建安二十四年 關羽が江陵から樊城に北伐すると、呂蒙が江陵を奪い、朱然が關羽を捕らえる。

孫權が曹操に皇帝即位を勸進、驃騎將軍・假節・領荊州牧、南昌侯となる。

黄初元年 正月、曹操が薨じ、曹丕が魏王を嗣ぐ。七月、孫權が曹丕に奉貢。十月、漢魏革命。

黄初二年 七月、劉備が荊州を攻撃。八月、孫權が魏に称臣し、吳王に封建される。

黄初三年 陸遜が劉備を破ると、孫權は魏に叛逆。劉備が崩ずると、吳と蜀が使者を往来させる。

20

◆『三國志』卷五十四 魯肅傳

【原文】

後に、備京に詣りて權に見え、荊州を都督せんことを求む。惟だ肅のみ、權に之を借して

共に曹公を拒ぐことを勸む「一」「一」。曹公、權土地を以て備を業せしむと聞き、方に書を作

25 るに、筆を地に落つ「二」。

【裴松之注】

「一」漢晉春秋に曰く、呂範備を留めんことを勸む「一」。肅曰く、「可からず。將軍神武の命世ある

と雖も、然るに曹公の威力實に重し。初めて荊州に臨み、恩信未だ洽からず。宜しく備に借す

30 を以て、之を撫安せしめよ。操の敵を多し、而して自ら樹黨と爲さば、計の上なり」と。權即ち

之に従ふ。

【三國志集解】

「一」荊州を借る事、蜀志先主傳建安十三年注引江表傳に詳しく見ゆ「二」。

35 袁枚「三」曰く、「孫權荊州を以て劉備を資くるは、肅實に之を勸むればなり。荊州還らず、權

深く肅の爲に病む。或曰く、「肅の心漢を忘れず、故に蛟龍を資くるに風雲を以てす」と。或

曰く、「是れ肅の失計にして、公瑾在らば必ず此を爲さざり」と。

是の二説は、皆天下の明計を明らかにせず、而れども夫の當日の形勢に熟籌する者なり。肅果た

して漢に忠たれば、則ち孫を去り劉に歸すれば可し。何ぞ必ずしも一心を懷きて以て君に事へんや。

40 若し以て計を失ふと爲さば、則ち當日の吳の爲に深くして計を得る者は、肅に如くは莫く、吳の爲

に淺くして計を失ふ者は、呂蒙・陸遜に如くは莫し。孫權智は短く量は小さく、用ふ能はざるを

惜しむ。

三國の時、最も強き者は操のみ、赤壁の戦に、權能く獨力にて以て曹を破るや、抑劉と合力し

45 て共に曹を破るや。荊州得て、權蜀を兼取して以て獨立する能ふや、抑終に草に依り木に付き

て以て自立するを免ぜざるや。孔明の蜀に謀るや、先に孫權と結び、而る後に魏を攻む。魯肅の吳

に謀るや、先に劉備と結び、而る後に魏を攻む。魏滅す可く、操誅す可きか、天下の事未だ量

る可からず。魏未だ滅す可からず、操未だ誅す可からざれば、唇齒已に固なれば、外難侵さず。

大丈夫將に三分して鼎足し、南面して稱帝せんとするのみ。安んぞ人の封拜を受け、節を一朝に

50 屈し、局促に轅に如き駒を下るを肯んぜんや。

英雄の見る所、大抵同じなり。惟孫權此に及ばざるを見て、然る後に荊州を襲ひ取り、和を魏

に通じ、而して此に従ひて臣を稱し子を質とし、日を虚くすること無し。亦惟昭烈此に及ばざ

るを見て、然る後荊州の故に因り、而して白帝に兵を稱へ、一敗して嘔血す。

特此のみか、曹操形勝の地に據り、百萬の衆を擁し、又孫權之の爲に外應するを得て、宜しく

55 卻顧する所無きが若くあるべし。然るに趙儼の襄陽の役、關羽を窮迫するを肯んぜず、之を留めて

權の爲に害とすることを勸め、操深く其の説を然りとす「四」。權關羽を擒へて自ら效とせんこ

とを請ひ、操其の奏を發露して、射て以て羽に示し、之を走らしむ。夫れ操の強を以て、猶ほ戰

國の兩利ありて俱に存するの説に學び、自ら其の敵を樹てんと欲す。

而るに區區たる吳、乃ち外に蜀の援を絶ち、孤軍もて操に當たるは、悻に已まざるや。力は能く操

60 に當たらず、勢は得て臣を稱するを得ず。既に臣を稱さば、勢は得て貢を納れざるを得ず、而して

封爵を受く。心甘からざる所有り、又詞を詭くして阿諛し、而して陰かに反復を爲す。邢貞は一

匹の夫なるのみ、敢へて詔を稱して倨傲たり、車に坐して自若たり。而して權は江東の兩世の王業

を以て、首を都亭に俯け、羣臣は流涕す「五」。此皆伯符の父子の地下に傷心する所にして、魯

肅の逆へて料る所なり。十に荊州を得て、其の辱を償ふに足るや否や。

肅の言に曰く、「宜しく相ひ輔協し、之と仇を同じくすべし」と。曰く、「九州を總括し、先に帝業

65 を成せ」と「六」。權此の言に負くこと有ると雖も、然るに黄初以後、魏の好繼がず、蜀使仍り

て通じ、事奈何にす可き無きに到るも、終に肅の料る所を出でず、徒然と叛名を魏に掛け、竊かに暮年に尊號す。先王の姉妹終へず、合肥の號令遠からず。自ら埋めて自ら摺り、形は狐鼠に同じく、良謀を用ひず、辱を取るに祇たる(七)。且つ權蜀と好を絶つの後、魏に亡ぼされざるは幸なり。蜀關羽の怨を修めて吳を伐ち、吳救ひを魏に求むるや、劉擘之を襲ふことを勸む。魏主従わざるに頼り、以て出兵を免かる(八)。後に魏備を討つを助くと偽り、仍りて之を襲わんと欲せども、陸遜兵を收むるに頼り、以て免す(九)。鍾會の蜀を伐つに至るに及び、吳力めて救わず、遂に兩亡に致る。此皆日後の明驗なる。然らば則ち此を知る者は、孔明・子敬のみにして、外に人無きや。曰く史の稱すらく、曹操方に書を作るに、權荊州を以て劉備を資くと聞き、覺えず筆を手より落つと。夫れ荊州已に曹の有に非ず。一家の物を一家に與ふるは、操と何ぞや。而るに乃ち駭然と震驚するは、正に魯肅の計の行はるるを恐れ、兩雄相ひ倚らば、天下争ひ難きが故なり。嗚呼、操の才終に孫・劉の上に出でし所以なるかな」と。

【補注】
(一)『三國志』卷五十六 呂範傳に、「劉備京に詣りて權に見え、範密かに備を留めんことを請ふ」とある。『三國志集解』呂範傳に、「亦魯肅傳注引漢晉春秋に見ゆ。此周瑜の所見と相ひ同じなり」とある。
(二)『三國志』卷五十四 周瑜傳に、「劉備左將軍を以て荊州牧を領し、公安に治す。備京に詣りて權に見ゆ。瑜上疏して曰く、「劉備は梟雄の姿を以て、而も關羽・張飛なる熊虎の將有り。必ず久しく屈して人の爲に用ひらる者に非ず。愚が大計に謂へらく、宜しく備を徙して吳に置き、盛んに爲に宮室を築き、其の美女の玩好するを多くし、以て其の耳目を娛ましめよ。此の二人を分け、各一方に置き、使し瑜が如き者挟むを得て、與に攻戦せば、大事定む可きなり。今猥りに土地を割きて以て資けて之を業せしめ、此の三人を聚めて俱に疆場に在らしまば、蛟龍の雲雨を得て、終に池中の物に非ざるを恐るなり」と。權曹公の北方に在るを以て、當に廣く英雄を撃むべしとすれども、又備卒に制し難きことを恐れ、故に納れず」とある。

『三國志集解』周瑜傳に、「通鑑、劉表の故吏多く劉備に歸し、備周瑜の給する所の地の少なきを以て、以て其の衆を容るに足らず、乃ち自ら京に詣りて孫權に見え、荊州を都督せんことを求む」とあり、「龐統傳注引江表傳に曰く、「先主問ひて曰く、「卿は周公瑾の功曹爲り。孤吳に到るに、此の人密かに白す事有り、仲謀に相ひ留めん事を勸むと聞く。之有らんや」と。統對へて曰く、「之有り」と。備歎息して曰く、「孤殆ど周瑜の手を免れず」と」とある。

100 (二)『三國志』卷三十二 先主傳 建安十三年 注引『江表傳』に、「周瑜南郡太守と爲り、南岸の地を分けて以て備に給す。備別に營を油江口に立て、名を改めて公安と爲す。劉表の吏士北軍に従ふを見て、多く叛きて來たりて備に投ず。備瑜の給ふ所の地少なきを以て、以て民を安ずるに足らざるとし、復た權從り荊州の數郡を借る」とある。先主傳に、「琦病死するや、羣下先主を推して荊州牧と爲し、公安を治とす。權稍く之を畏れ、妹を進めて好を固くす。先主京に至り、權に見え、恩紀を綢繆す(結ぶ)。權使を遣はして、共に蜀を取らんと欲すと云ふ。或以爲へらく、「宜しく聽許に報ゆべし。吳終に荊を越えて蜀を有つ能はず。蜀の地、己の有と爲る可し」と。荊州主簿の殷觀進みて曰く、「若し吳の先驅と爲れば、進まば未だ能く蜀に克たず、退かば吳の乗ずる所と爲る。事に即けて去れ。今は但だ其の伐蜀に贊じて然る可し。而して自ら、新たに諸郡に據りて未だ興動す可からずと説け。吳は必ず敢へて我を越えて獨り蜀を取らず。此の如き進退の計もて、以て吳蜀の利を收む可し」と。先主之に従ひ、權果たして計を輟む。觀を遷して別駕從事と爲す」とある。『三國志集解』先主傳に、「殷觀、字は孔休、楊戲季漢輔臣贊に見ゆ」とあり、『三國志』卷四十五に、「孔休、名は觀。荊州主簿・別駕從事と爲り、先主傳に見ゆ。其の郡縣を失す」とある。殷觀については、他に見えない。

105 袁枚(一七一六〜一七九八年)は、錢塘(浙江杭州)の人。字は子才。清朝の乾嘉期の代表的な詩人・散文家・文學評論家、美食家。「性靈說」を提唱し、趙翼・蔣士銓とともに、「乾嘉三大家」あるいは「江右三大家」と称された。著作は、『子不語』など。

110 『三國志』卷二十三 趙儼傳に、「關羽征南將軍の曹仁を樊に圍む。儼議郎を以て仁の軍事に參じて南行し、平寇將軍の徐晃と俱に前む。既に到るや、羽仁を圍むこと遂に堅く、餘の救兵未だ到らず。晃の督する所圍を解くに足らず、而るに諸將晃を呵責し救はんことを促す。儼諸將に謂ひて曰く、「今賊の圍は素より固し。水潦猶ほ盛んなり。我が徒卒單少にして、仁隔絶して同力するを得ず。此の舉適に内外を弊れしむ所以なり。當今軍を前めて圍に偪り、謀を遣はして仁に通じ、外救あるを知らしめ、以て將士を勵ますに若かず。北軍を計るに十日を過ぎず、尙ほ堅守するに足る。然る後、表裏俱に發さば、賊を破ること必なり。如し緩救の戮有らば、余諸軍の爲に之に當たらん」と。諸將皆喜び、便ち地道を作り、箭書を飛ばして仁に與へ、消息數と通ず。北軍亦至り、勢を并せて大いに戰ふ。羽の軍既に退くも、舟船猶ほ沔水に據り、襄陽隔絶して通ぜず。而るに孫權襲ひて羽の輜重を取る。羽之を聞き、即ち走りて南のかた還る。仁諸將に會して議し、咸曰く、「今羽の危懼に因らば、必ず追ひて禽とす可きなり」と。儼曰く、「權羽の連兵の難を邀へ、其の後を掩制せんと欲す。羽の還りて救ふに顧み、我の其の兩疲を承くるを恐る。故に辭に順ひ效を求め、讒に乗じて變に因り、以て利鈍を觀るのみ。今羽已に孤り進る。更に宜しく之を存して以て權の害と爲すべし。若し深く入りて北に追はば、權則ち虞へを彼に改め、將に患を我に生ぜんとす。王必ず此を以て深慮を爲す」と。仁乃ち嚴を解く。太祖羽の走るを聞き、諸將の之を追ふことを恐る。果して疾く仁に救す。儼の策する所が如し」とある。

120 仁に通じ、外救あるを知らしめ、以て將士を勵ますに若かず。北軍を計るに十日を過ぎず、尙ほ堅守するに足る。然る後、表裏俱に發さば、賊を破ること必なり。如し緩救の戮有らば、余諸軍の爲に之に當たらん」と。諸將皆喜び、便ち地道を作り、箭書を飛ばして仁に與へ、消息數と通ず。北軍亦至り、勢を并せて大いに戰ふ。羽の軍既に退くも、舟船猶ほ沔水に據り、襄陽隔絶して通ぜず。而るに孫權襲ひて羽の輜重を取る。羽之を聞き、即ち走りて南のかた還る。仁諸將に會して議し、咸曰く、「今羽の危懼に因らば、必ず追ひて禽とす可きなり」と。儼曰く、「權羽の連兵の難を邀へ、其の後を掩制せんと欲す。羽の還りて救ふに顧み、我の其の兩疲を承くるを恐る。故に辭に順ひ效を求め、讒に乗じて變に因り、以て利鈍を觀るのみ。今羽已に孤り進る。更に宜しく之を存して以て權の害と爲すべし。若し深く入りて北に追はば、權則ち虞へを彼に改め、將に患を我に生ぜんとす。王必ず此を以て深慮を爲す」と。仁乃ち嚴を解く。太祖羽の走るを聞き、諸將の之を追ふことを恐る。果して疾く仁に救す。儼の策する所が如し」とある。

『三國志集解』趙儼傳に、「胡三省曰く、趙儼の計、此れ戦國の策士の所謂、兩利ありて俱に之を存するの計なり。嚴を解くは、嚴しき所の兵を解き、復た羽を追はざるなり。是の後、陸遜、劉備を峡中に破り、兵を收めて還り、復た備を追はず。計亦此に出づ」とある。胡三省が言及している陸遜の事は、補注(九)を参照。

(五)『三國志』卷一文帝紀 黃初二年に、「秋八月、孫權 使を遣りて章を奉じ、并せて于禁らを遣はして還す。丁巳、太常の邢貞をして持節して權に拜して大將軍と爲し、吳王に封じ、九錫を加へしむ」とある。『三國志』卷十四 程昱傳に、「昱の性は剛戾にして、人と多く交らふ。人の昱に謀反を告ぐる有り、太祖 賜待すること益と厚し。魏國 既に建ち、衛尉と爲り、中尉の邢貞と威儀を争ひ、免ぜらる。文帝 踐阼するや、復た衛尉と爲る」とある。

140 『三國志』卷五十二 張昭傳に、「魏黃初二年、使者の邢貞を遣はして權に拜して吳王と爲す。貞入門するや、下車せず。昭貞に謂ひて曰く、「夫れ禮は敬はざることを無くんば、故に法は行はざることを無し。而るに君 敢へて自ら尊大なるは、豈に江南の寡弱を以て、方寸の刃無き故や」と。貞即ち遽かに下車す」とある。

145 『三國志』卷五十五 徐盛傳に、「權 魏の爲に藩と稱するに及び、魏 邢貞を使はして權を拜して吳王と爲す。權 都亭に出でて貞に候ふに、貞 驕色有り。張昭 既に怒り、而して盛 忿憤し、顧みて同列に謂ひて曰く、「盛ら身を奮ひ命を出だし、國家の爲に許洛を并はせ、巴蜀を吞すること能はず、而して吾が君をして貞と盟はしむ。亦辱ならずや」と。因りて涕泣して横流す。貞之を聞き、其の旅に謂ひて曰く、「江東の將相 此の如し。久しく人に下る者に非ざるなり」とある。

150 (六)『三國志』卷五十四 呂蒙傳に、「初め、魯肅ら以爲へらく曹公 尙ほ存し、禍難 始めて搆ふ。宜しく相ひ輔協し、之と與に仇を同じくすべし、失ふ可からざるなりと。蒙 乃ち密かに計策を陳べて曰く……」とある。『三國志』魯肅傳に、赤壁の戦い後のこととして、「徐ろに鞭を擧げて言ひて曰く、「願はくは至尊は威徳を四海に加へ、九州を總括し、克ちて帝業を成せ。更に安車・輦輪を以て肅を徴さば、始めて當に顯なるべし」と。權 掌を撫でて歡笑す」とある。

155 (七)『三國志』卷四十七 吳主傳 黃武元年に、「初め、權 外は魏に事ふるに託け、而るに誠心は款せず。魏 乃ち侍中の辛毗・尙書の桓階を遣はして往きて盟誓し、并せて任子を徴さんとするも、權 辭讓して受けず。秋九月、魏 乃ち曹休・張遼・臧覇に命じて洞口に出でしめ、曹仁に濡須に出で、曹眞・夏侯尙・張郃・徐晃に南郡を圍はしむ。權 呂範らを遣はして五軍を督し、舟軍を以て休らを拒がしめ、諸葛瑾・潘璋・楊綏に南郡を救はしめ、朱桓 濡須の督を以て仁を拒がしむ。時に揚

160 ・越の蠻夷 多く未だ平集せず、内の難 未だ弭まず、故に權 辭を卑くして上書し、自ら改厲せんことを求め、「若し罪在りて除き難くば、必ず置かれず、當に土地・民人を奉還すべし、命を交州に寄せ、以て餘年を終へんことを乞ふ」と。文帝 報いて曰く、「君 擾攘の際に生まれ、本は從横の志有り、身を降して國に奉り、以て茲の祚を享く。君 名を策して自り已來、貢獻は路に盈つ。備を討つ功、國朝に成せりと仰す。埋めて之を掘るは、古人の恥ずる所なり。朕の君と與にある

165 や、大義 已に定まる。豈に師を勞し遠く江漢に臨むを樂しむや」とあり、同注引『國語』に、「狸は之を埋め、狸之を掘る。是を以て功を成す無きなり」とある。

(八)『三國志』卷十四 劉曄傳に、「備 果たして出兵して吳を撃つ。吳 國を悉くして之に應じて、使を遣はして藩を稱す。朝臣 皆 賀すに、獨り曄曰く、「吳 絶えて江漢の表に在り、内臣の心無きこと久し。陛下 徳は有虞に齊しきと雖も、然るに醜虜の性 未だ感ぜしむる所に有ず。因りて臣たるを求め難く、必ず信じ難きなり。彼 必ず外に迫られ内に困して然る後に此の使を發すのみ。其の窮に因りて襲はば之を取る可し。夫れ一日 敵を 縦にせば、數世の患なり。察せざる可からざるなり」と。備の軍 敗退し、吳の禮敬 轉じて廢る。帝 衆を興して之を伐たんと欲せども、曄 以爲へらく、「彼 新たに志を得て、上下 心を齊しくす。而も江湖に阻帶す。必ず倉卒にすること難し」と。帝 聽さず」とある。

170 (九)『三國志』卷五十八 陸遜傳に、夷陵の戦いの後のこととして、「又 備 既に白帝に住ま。徐盛・潘璋・宋謙ら、各と競ひ表して備は必ず禽ふ可しと言ひ、復た之を攻めんことを乞ふ。權 以て遜に問ふ。遜 朱然・駱統と以爲へらく、曹丕 大いに士衆を合はせ、外は國を助けて備を討つことに託し、内は實に姦心有り。謹みて計を決するに、輒ち還れ。幾も無く、魏軍 果して出で、三方に敵を受くるなり」とある。同注引『吳錄』に、「劉備 魏軍 大いに出づると聞き、書もて遜に與へて云はく、「賊 今 已に江陵に在り、吾 將に復た東せんとす。將軍 其れ能く然りとすと謂ふや、不や」と。遜 答へて曰く、「但だ軍 新たに破れ、創痕 未だ復せざることを恐る。始めて親を通せんことを求め、且つ當に自ら補ふべし。未だ暇あらざれば兵を窮むるのみ。若し算を 惟ず、復た傾覆の餘を以て、遠く送りて以て來らんと欲さば、命を逃す所無し」とある。

185 (一〇)『資治通鑑』卷六十六 漢紀五十八 建安十五年、權 魯肅を以て奮武校尉と爲し、瑜に代へて兵を領せしめ、程普をして南郡太守を領せしむ。魯肅 權に荊州を以て劉備に借し、共に曹操を拒ぐことを勸む。權 之に従ふ。乃ち豫章を分けて番陽郡と爲し、長沙を分けて漢昌郡と爲す。復た程普を以て江夏太守を領し、魯肅を漢昌太守と爲し、陸口に屯せしむ」とある。

190 (一一)何焯(一六六一〜一七二二年)は、清代前期の学者。字は岷瞻、號は義門。江蘇省長州の人。翰林院編修として經書・正史の校刊に従事し、考証學全盛への一端をになつた。主著は、『義門讀書記』であり、經書・正史のみならず、『文選』等の詩文にも、字句に即した批評を加える。

【原文】

195 周瑜 病むや、因りて上疏して曰く「一、「當今の天下、方に事役有り。是れ瑜 乃ち心 夙夜に憂ふ所なり。願はくは至尊、先に未然に慮らば、然る後に康樂たり。今 既に、曹操と敵と爲る。劉備 近く公安に在り、邊境 密邇なるとも、百姓 未だ附かず。宜しく良將を得て以て之を鎮撫すべし。魯肅、智略 任すに足る。以て瑜に代へんことを乞ふ。瑜 隕踏の日にありて、

懐く所盡せり」と「二」。即ち肅を奮武校尉に拜し、瑜に代はりて兵を領せしむ。瑜の士衆四千餘人、奉邑四縣「二二」、皆屬す。程普をして南郡太守を領せしむ。肅、初め江陵に住まり、後に下りて陸口に屯す「二三」。威恩、大に行ひ、衆萬餘人を増し、漢昌太守「四」・偏將軍を拜す。十九年、權に従いて皖城を破り、横江將軍に轉ず「五」。

【裴松之注】

「一」江表傳 載するに、「初め瑜 疾困し、權に賤を與へて曰く、「瑜 凡才を以て、昔 討逆の殊特の遇を受け、腹心を以て委ねらる。遂に榮任を荷ひ、兵馬を統御し、志は鞭弭を執り、自ら戎行を效す。

205 巴蜀を定めんことを規り、次に襄陽を取り、威靈に憑頼せば、在握するが若しと謂へり。以て不謹に至り、道に暴疾に遇ひ、昨に自ら醫療するも、日に無損を加ふ。人の生に死有あり、短命を修むは、誠に惜むに足らず。但だ微志の未だ展かず、復た教命を奉ぜざるを恨むのみ。方今 曹公 北に在り、疆場 未だ靜ならず。劉備 寄寓し、虎を養ふに似る有り「六」。天下の事「七」、未だ終始を知らず。此れ朝士 盱食の秋「八」、至尊 垂慮の日なり。魯肅は忠烈にして、事に臨みて 苟にせず、以て瑜に代ふ可し。人の將に死なんとするや、其の言や善し。儻し或いは採る可からば、瑜死せども朽ちず」と。此の賤と本傳「九」の載する所とを案ずるに、意旨は同じと雖も、其の辭は乖異ある耳「一〇」。

【三國志集解】

210 「一」宋本、「因」を「困」に作る。「周瑜 病困し、上疏して曰く」となる

215 「二」即ち、下雋・漢昌・劉陽・州陵の四縣なり「一」。

220 「三」陸口は孫權傳 建安十五年に見ゆ。顧祖禹曰く、「昌江山 岳州府の平江權の東南一里に在り、一名を魯德山といふ。魯肅嘗て兵を此に屯せしめ、後人之を徳として、因りて名づく」と。

「四」漢昌は、孫權傳 建安十五年に見ゆ「二」。

「五」横江將軍、一人、吳置く。

「六」胡三省曰く、「虎を養ふは、將に自ら患ひを遣さんとするを言ふ」と。

「七」宋本、「未」の上に「而」字有り、誤なり、通鑑 之無し。

「八」胡三省曰く、「盱、古旦の翻、晩なり」と。

「九」宋本、「傳」字無し、誤なり。

「一〇」册府「乖」を「微」に作り、官本「耳」を「矣」に作る。

【補注】

(一)『三國志』周瑜傳に、「權 瑜を偏將軍に拜し、南郡太守を領せしむ。下雋・漢昌・劉陽・州陵を

以て奉邑と爲し、屯して江陵に據らしむ」とある。

230 『三國志』吳主傳に、「十四年、瑜・仁、相ひ守ること歲餘、殺傷する所甚だ衆し。仁 城を委て走る。權 瑜を以て南郡太守と爲す。劉備 權を表して行車騎將軍とし、徐州牧を領せしむ。備は荊州牧を領し、公安に屯す」とある。『三國志集解』吳主傳に、「公安、今の湖北荊州府の公安縣の東北なり、蜀志 劉璋傳に見ゆ、……通鑑に、孫權 周瑜を以て南郡太守を領して江陵に屯據せしめ、程普 江夏太守を領して沙羨に屯し、呂範 彭澤太守を領し、呂蒙 尋陽令を領す。會 劉琦 卒し、權 備を以て荊州牧を領せしむ。周瑜 南岸の地を分けて以て備に給し、備 營を油口に立てて、名を公安に改む。權 妹を以て備に妻はす」とある。

240 (二)『三國志』吳主傳に、「十五年、豫章を分けて鄱陽郡を爲る。長沙を分けて漢昌郡を爲る。魯肅を以て太守と爲し、陸口に屯せしむ」とあり、『三國志集解』に、鄱陽郡について、「豫章郡は孫策傳に見え、鄱陽郡は前の建安八年に見ゆ」とある。漢昌郡について、「長沙は孫堅傳に見え、胡三省曰く、「鄱陽、今の饒州の地なり。沈約志 長沙郡に吳昌縣有り、漢末の漢昌なり。吳 名を更む。隋に至りて吳昌を廢して羅縣に入る……」と。

245 錢大昕曰く、「是の時、長沙 劉備の據る所と爲る。建安十九年、權 始めて長沙三郡を得て、漢昌仍りて長沙に併入し、別に郡を立てず」と。弼 按ずらく、魯肅傳に肅 建安二十二年に卒すと。呂蒙傳に魯肅 卒するや、蒙 陸口に屯し、肅の軍 蒙に屬し、又 漢昌太守を拜すと。是 漢昌 未だ長沙に併入せざるなり。竹汀の説は誤なり。

250 錢大昭曰く、「漢志 漢昌縣無し。隸釋 周憬碑陰に、長沙漢昌の口祇 字は宣節有り。碑 靈帝の熹平(二七二―二七八)時に立てらる。則ちの縣、必ず桓・靈時に置かれ、是の時に至り、又立てて郡と爲るなり」と。謝鍾英曰く、「寰宇記に、後漢 羅縣を分けて漢昌を爲り、孫權 縣に郡に立て、改めて吳昌縣と爲すと。方輿紀要に、今の湖南岳州平江縣の東なり」ととある。

255 陸口について、「水經 江水注に、「江水 烏林の南を左に逕き、又東し、右岸に蒲磯口を得、即ち陸口なり。水下雋縣の西の三山溪より出で、蒲圻縣の北に入り、呂蒙城の西を迂く。昔 孫權 長沙・零・桂を征するとき、鎮せし所なり」と。寰宇記に、「蒲圻縣 流を沂ること八十里なり」と。謝鍾英曰く、「今の蒲圻縣の西北八十里に陸溪口あり」と。弼 按ずらく、是の年、周瑜 巴丘に卒し、魯肅 瑜に代はりて兵を領す。肅 初め江陵に住まり、後に下りて陸口に屯す。肅傳に見ゆ。又是の年 孫權 步騭を遣はして交州刺史・交趾太守と爲す。士燮 兄弟を率ゐて節度を奉承し、是に由り嶺南 始めて權に服屬す。士燮傳に見ゆ」とある。